



TITLE:

雑録

AUTHOR(S):

CITATION:

雑録. 日本外科宝函 1925, 2(3): 504-507

ISSUE DATE:

1925

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/193157>

RIGHT:

第二十六回日本外科學會所感

Y 生

□研究熱ノ勃興ト研究者ノ増加ト相俟ツテ、近年學會が段々隆盛ニナツテ來タ事ハ一面欣ブベキ現象デハアルガ、此ノ二三年來演題ノ數が甚シク増加シ今年ノ如キハ二題ノ宿題報告ノ他ニ尙ホ二百十一題ト云フ多數ニ上リ、會場ヲ二ヶ所ニ分チテ漸ク間ニ合ハセテ居ルト云フ一種妙ナ狀態デアルカラ、聽ク人ハ其ノ全部ヲ聽ク事ハ全ク不可能デアリ、且、兩方ノ會場デ聽キタイト思フ演説が殆ド同ジ頃ニアル時ハ必然何レカ一方ヲ犧牲ニ供シナケレバナラヌ。又眞面目ナ報告ノアル間ニ會場ヲ出入スル事ハ慎マナケレバナラヌトスレバ少クトモ或日ノ午前カ午後カハ一ヶ所ノ會場ニ居ル事デアルシ、自然一方ヲ捨テ、一ツノ會場デ自分ノ聽キタイト思フ演説二三ヲ聽クト云フニ止ルダロウ。最近二三年來ノ外科學會ニ出席スル人ハ誰モ斯ウイフ仕方ヲサレル事ト思ハレル。

□今年ノ外科學會ニ出席シテ見タ儘、聽イタ儘、ソシテ感じタ儘ヲ書イテ見タイト思フケレド、之モ前述ベタ様ナワケデ、自分が聽キタイト思ツタモノ、一部分又ハ自分が多少面白イト思ツタモノ、極少數ニ過ギナイ。

□後藤鏖枝氏 臨牀及ビ病理學の見地ヨリ見タル蟲様突起炎手術時期ニ就テ從來一般ノ考ヲ破ツテ蟲様突起炎ノ發病後ノ經過時間、現症ヲ顧慮スル事ナクシテ、蟲様垂ノ切除ヲ施シテ大ナル支障ヲ認メナイト云フ報告ハ一寸人ノ注意ヲ引イタ。蓋シ一問題デ十分間ノ演説デバ八十八例ノ症例ニ就テ氏ノ言ハント欲スル所ヲ盡セナカツタ事デアロウガ、如何ナル場合デモ絶對ニ危険ナキヤ否ヤ更ニ慎重ニ考慮討究スベキ問題ト謂フベキデアル。

□岩永仁雄氏 蟲様突起切除困難ナル場合ニ於ケル粘膜炎拔除法

蟲様突起が癒着強度廣範ナタメ又ハ膿瘍形成ナドデ、切除ノ困難ナ時ニ癒着部デ蟲様突起ノ漿膜筋層ヲ輪狀ニ切ツテ、粘膜炎ヲ徐々ニ拔除シ漿膜筋層ノ斷端ヲ結紮スルト云フハ面白イ考デアル。次ニソウイフ場合ニ遭遇シタラ是非試ミタイト考ヘルガ、蟲様突起が甚シク屈曲シテ居ル場合ニモ完全ニ拔去出來ルダロウカ、又止ムヲ得ズ蟲様突起ノ尖端ニ近ク此ノ方法ヲ行ハネバナラヌ様ナ時ニハ、遺殘シタ漿膜筋層ノミトナツタ蟲様突起ノ内面ニ腸粘膜炎ガ新生シテ來ル様ナ事ハナイカ、又コノ様ナ場合ニハ永久ニ蟲様突起炎ノ再發ハナイモノダロウカ、之等ハ更ニ長期ノ觀察ヲ要スル點デハナカラウカ。

□前田和三郎氏 腸管疊積症ニ關スル實驗的研究

從來トハ全ク別個ノ方法デ實驗シテ、腸管疊積症ノ成因ニ就テ麻痺說ヲ打破シテ痙攣說ニ對シテ斷定的ノ根據ヲ與エ、又其ノ際ノ縱走筋ト輪狀筋トノ態度ヲ觀、更ニ所謂病的疊積ニ就テ中樞神經系ノ影響ヲ蒙リ難イ時ニ疊積ガ持續スルト云フ說ヲナシタ明確サハ確ニ見上ケタ所デアル。然シ麻痺說ヲ打破スルニ今一息ト云フ感ガナイデモナカツタ。又誰カ「疊積生成時口位ノ腸管ガ入り込ムニ非ズシテ肛位ノ部分ガ被ヒカフサルナリ」ト云フ前田出ノ說ニ對シテ、臨牀上ノ立場カラ、小腸ガS字狀部近ク迄疊積セル事アリ、ソレデモ被ヒカフサルノ一點張リデ説明出來ルカト討論シタ人ガアツタ。蓋シ一應尤モナ考デ當然茲ニ至ルベキ疑問デアル。眞理ニ忠實ナ前田氏モ亦更ニ更ニ探究スベキ所デハナカラウカ。

□横田浩吉氏 門脈系ヲ腹壁循環系統ニ交通セシムル一新法
實ニ面白い。「イデー」ノ獨創的デ、ソシテ結果ノ良カツタト云フ事ハ日本

外科學會トシテ誇ツテ然ルベキ業績ノ一デアロウ。

〔第二日午前ノ第二會場ニハ所謂動脈壁交感神經切除術ニ關スル研究ガ多數ニ集ツテ主要ナ題目トナツタ。小林大乗氏ハ流血量ノ測定ニ由ツテ純然タル實驗ノ立場カラ論ジ、他ハ臨床上特發脫疽、骨又ハ關節結核等ニ對スル治療ノ效果ニ就テ自説ヲ述ベタモノデアルガ、大多數ノ意見ハ效果ハ永續ノデナイ事ニ一致シ、後藤教授其他多數ノ追加者ノ意見亦之ニ一致ヲ見タ。關口教授ハ此ノ際純理論ノニレノノ氏病ニ對シテハ本手術ヲ施スハ合理的デアロウガ、「エンドアルテリチス、オブリテランス」ナル解剖的變化ヲ伴フ事ノ明ナ特發脫疽ニ對シテ、單ニ一時的ニ流血量ノ増加ヲ見ルガ如キ本手術ヲ行フハ決シテ合理的ナ事トハ謂ハレナイト云フ見解ヲ述ベラレタ。蓋シ一見識ニハ達ヒナイガ、本症ノ様ニ治療ノ困難ナモノニ對シテ人ガ此ノ方面カラ入ツテ治療ノ新生面ヲ開カントスルハ當然ノ事デ非難スル事ハ出來マイト思フ。

〔多數ノ該問題ニ關スル研究中、小林大乗氏ト大澤達氏ト同一ノ「イデー」ノ下ニ、腹部交感神經節狀索切除ニ就テ、前者ハ實驗的ニ研究シテ流血量ノ増加ガ急速デ且動脈外壁切除ニ比シテ持續長期ニ亘ル事ヲ確證シ、後者ハ始メテ之ヲ二例ノ特發脫疽ニ試ミテ其效果ノ極メテ顯著ナルヲ經驗シ、患者ヲ供覽シテ精細ナル報告ガアツタ。小林氏ノ基礎的實驗ト大澤氏ノ臨牀上ノ經驗トヨク相一致シ、而カモ從來後座ヲ拜シテ居タ歐米ノ外科學會ノ先ヲ越シテ一步ヲ抽デタ點ハ大ニ痛快味ヲ感ゼシメ、人ノ注意興味ヲ引ク事大ナルモノガアツタ。本年ノ學會ニ於ケル出色ノ業績デアロウ。

〔第二日午後ノ第一會場デハ主トシテ胸腔外科ニ就テ論議セラレ、興味アル演説ガ多數ニ集ツタ。

〔西尾重氏 臍胸治癒ノ機轉ニ就テ、

昨年ノ學會ニ伊藤肇氏ガ陳舊性臍胸ノ治療方針トシテ瘻孔ヲ閉鎖シテ死腔ヲ殘シタル儘完全ニ治癒セシメ得ト言ヘルヲ確實ニ追認シ、更ニ無菌的ニ家兎ノ體壁肋膜ヲ切除シテ其ノ治癒現象ヲ觀察シ、一定時日ノ後ニハ該部ニ般

子形ノ細胞ヲ生ジテ其ノ内面ヲ被ヒ、肋膜被蓋細胞ニ近似シタ形態ヲ示セルモノヲ生ズルノヲ認メ、臍胸ガ死腔ヲ殘シテ治癒スル際ニモカ、ル治癒現象ヲ見ルモノナルベキヲ説カレタ。臍胸ト云フ著明ナ感染狀態ニアリシモノガ死腔ヲ殘シテ治スル場合ト、始メカラ無菌的ニ肋膜ヲ切除シタ時トヲ同様ノ考ノ下ニ對比スルノハドウダロウカ。又氏ハ無菌的ニ切除シタ肋膜缺損部ニ生ズル軟子形細胞ヲ肋膜被蓋細胞ノ再生ニ因ルモノト解スベキダト云フ様ナ説デアツタガ、然シ之モ結締組織細胞ノ化生ニ因ルモノデナイト云フ反證ハ直ニ擧ゲ難イ所デ、此ノ點ハ問題ノ核心ニハ觸レナイケレドモ他ノ研究操作ニ依ツテ更ニ追究セラルベキモノデアロウ。同氏ノ演説ニハ二三討論ガアツタガ皆多少見當違ヒノ討論デアツタ様ダ。誰カシエーデ氏ノ手術ヲシテ肺臟ヲ膨脹セシムルノガ良イナド、言ツタ人モアツタ様ダガ、元來シエーデ氏ノ手術ハ肺臟ヲ膨脹セシムル爲ノモノデナクテ、胸廓ヲ萎縮セシメテ死腔ヲ無クシヨウト云フ趣旨ニ出タモノデハナイカト思ハレタ。

〔工藤八郎氏 肺臟手術ノ實驗的基礎、

〔日下部且三氏 一側全肺葉剔出ニ關スル實驗的研究、

〔中村受助氏 家兎肺臟切除、剔出後ノ呼吸及ビ血液ノ變常ニ就テ、

〔同氏 家兎肺臟切除剔出後ニ於ケル胸壁ノ變形及ビ内容臟器ノ變位ト其ノ豫防ニ關スル實驗的研究、

等數題ノ肺臟外科ニ關スル報告ニ次デ、工藤氏ニ對スル誰カノ質問ヲ受ケテ鳥潟教授ノ追加ガアリ、之ヲ動機ニ外科學會ニ在ツテ茲數年來曾テ見ナカツタ緊張シタ眞面目ヲ學會ラシイ場面ガ現ハレタ。

〔鳥潟教授ノ追加演説ハ大要左ノ様ナモノデアツタト記憶スル。『自分ハ嘗テ一九一三年ザウエルブルフ氏ノ臨牀ヲ訪レテ其ノ手術ヲ觀タ。其ノ時同氏ガ過壓裝置ヲ使用シテ手術ヲ施セルヲ見ナガラ、シカモ尙、過壓裝置等ハ無クトモ胸腔ヲ開クニ妨ゲナイモノダロウト云フ印象ヲ得タ。爾來今日迄之ヲ認ムルノ機會ヲ持タナカツタガ、近時工藤氏ヲシテ行ハシメタ實驗ノ結果ニ由

ツテ、少クトモ實驗的ニハ過壓裝置ヲ使用セズトモ手術ニ妨ゲナカルベキ信念ヲ得タノデ、二例ノ患者ニ就テ之ヲ試ミタ。始メ該裝置ヲ施シテ萬一ノ場合ニ備ヘ、而カモ壓ヲ加フル事ナクシテ左側胸廓ヲ開キ何等願慮スベキ危險ヲ支障ヲ認ムル事ナクシテ手術ヲ終ル事ヲ得タ。トテ二例ノ患者ノ病史ヲ廻覽ニ供シテ精細ナル臨牀的ノ追加ガアツタ。之ニ對シテ後藤教授、故鈴木寛之助博士等ハ軍陣外科ノ立場カラ、歐洲大戰ニ際シテ佛獨兩國學界ノ探レル方針ヲ述ベテ必ズシモ過壓裝置ヲ用フルノ必要ナカルベキヲ說キテ之ニ賛シ尾見博士、佐藤清一郎博士等亦自家經驗ヨリ推考シテ、一度迄ハ該裝置ノ必要ナカルベキヲ唱ヘ、關口教授ハ「過壓裝置ヲ使用シテ手術シ、將ニ胸腔ヲ開クニ際シテ該裝置ニ故障ヲ來シ、タメニ呼吸ノ停止ヲ來シテ甚シキ危險ニ類シタル」自家經驗ヲ舉ゲテ之ニ反對セラレ、鳥瀉教授ハザウエルブルフ氏ノ教室ニ於テ過壓裝置ヲ用ヒテ手術ヲ施スモ尙往々同様ノ狀態ニ陷ル事アリ而カモ直ニ恢復ス。自家經驗ノ二例ニアリテモ一時呼吸ノ停止ヲ來シタレドモ暫ク注意シテ觀テ居ル内ニ再ビ平靜ナル呼吸ヲ開始セリトテ、一時的ノ呼吸停止ノ特ニ願慮スル要ナキヲ說カレ、且、該側肺及ビ縱隔膜ハ食鹽水「ガーベ」ヲ以テ壓シテ手術スベシトテ其ノ際ノ注意ヲモ與エラレタ。角田氏ガ九大三宅外科ニテノ經驗ヨリ追加シテ、過壓裝置ヲ使用シテ手術スルニ際シ術者ヲシテ樂ニ手術ヲ行ハシムル爲ニ壓ヲ零迄下グル事多カリシトノ追加ハ該裝置ノ絕對ニ必要ナルモノニ非ザルヲ明ニ裏書シタルモノト聞カレタ。其他二三動物ノ種類ニヨリテ過壓裝置ノ絕對ニ必要ナルヲ說カレタ人モアツタガ、之ハ犬ノ縱隔膜ノ解剖の關係ノ然ラシムル所デ今直ニ以テ問題トスベキハナカラウ。

終ニ鳥瀉教授ヨリ「吾々ハ獨乙派外科ヲ嚆呑ミニシ其ノ言フ所ヲ金科玉條トナシテ、只其ノ後塵ヲノミ之拜スルハ抑モ非ナリ。自ラ信ジタル所ニ向ツテ研究ノ歩ヲ進メテ堂々トシテ日本外科學會ノ學術上ノ獨立ヲ期スベキデア」ト云フ意味ノ主張ガアリ、三宅會長ノ動議ニテ本問題ヲ來年ノ日本外科

學會ノ大研究事項トシテ討究スベク全員ノ賛成ヲ得タ。

今迄只「恐ロシイモノ」、「過壓裝置ナクシテ胸廓ヲ開クハ甚ダ危險ナリ」トノ先入主ニ惑ハサレ過キテ此所ニ進ミ得ナカツタノデハアルマイカ。眞理ノ探求ニ忠ナルモノ、學ニ忠ナルモノハ更ニ勇ヲ鼓シテ邁進スベキデアル。

□其ノ後、泉山幸吉氏 變壓呼吸ノ血液成分ニ及ボス影響ノ實驗的研究、關口蕃樹 植林昌四郎兩氏、過壓裝置ノ血液瓦斯ニ及ボス影響ニ就テ、等眞摯ナ基礎的ナ實驗ノ報告ガアツタガアマリ人ノ注意ヲヒカナカツタ事ハ惜シカツタ。

□石山福次郎氏 氣管枝喘息ノ外科的療法特ニ頸部交感神經幹切除術トフロインド氏手術トノ比較及ビ後者ノ遠隔成績ニ就テ、

キュンメル氏ノ主唱スル頸部交感神經幹切除ノ効果ガ一過性ニシテ卓越セルモノニ非ザルヲ唱ヘ、フロインド氏手術ノ優秀ナルヲ自家經驗ト從來ノ經驗ニヨル遠隔成績ニ徴シテ主張シ。

□木村敬義氏亦頸部交感節切除術ノ治療の價值ニ就テ石山氏ノ說ニ賛シタ。

□佐藤清一郎氏 肺臟腫瘍ノ疼痛ニ對スル氣胸療法ノ價值、

二例ノ患者ニ就キ氣胸ヲ起サシメテ肺腫瘍ニ因ル頑固ナル神經痛ト胸内苦ヲ去ラシメ得タルヲ報ゼラレタ、根治の手段デハナイガ臨床家ノ参考トナル所デア。

抑モ學會ハ多年ノ研究ニナル學說ノ發表ガアリ、自家經驗ノ被瀝ガアリ會員多數ノ自由討究ガアルベキ筈デア。之ニハ大家モアルベカラズ、小家モアルベカラズ、總テ平等ノ立場ニアルベキ筈デア。然ルニ此ノ數年來ノ學會ヲ觀ルニ、演說スルモノハ教室ニ研究スルモノガ其ノ結果ヲ只形式的ニ發表スベク十分間演壇ニ立ツタメニ開カレタカノ觀ガアリ、又平素研究ニ没頭シテモ居ナイモノガ所謂一夜演ノ原稿ヲ作ツテ其ノ場限リノ賑カシヤヤルモノガ無クデモナカツタ様デア。大學教授ハ老大家然トシテ高クトマリ、演說ニ對シテハ質問追加モ尠ケレバ討論モ殆ド無シ、聽衆ハ只聽クダケ、演者

ハ原稿ヲ十分間ニシテ讀ミ終レバ足レリト云フ形デアツタ。吾々若イ者ニトツテ「學問ノ討究場タルベキ學會トハコンナモノダロウカ」ト云フ感ヲ與ヘタ「實ニツマラナイ」、コンナ學會ナラ敢テ十分間喋ラナクトモ文章ニ殘シタ方が餘程マシダト云フ感ヲ起サシメタ。震災後デアツタ爲デモアラウガ昨年ノ學會ナドハ實ニオ話ニナラナカツタ。

所ガ、今年ノ學會ハコンナ感じヲ全ク裏切ツテ終始一貫質問追加討論ノナイ演說ハ寧ロ尠イ位ニ元氣満場ニ溢レ、而カモ討論モ追加モ若イ者ニ限ラレズ、堂々タル大學教授ガ續々トシテ立チ、教授モナケレバ助手モナク、大家モナケレバ小家モナク、總テ一樣ニ眞理ノ前ニ身ヲ捧ゲタ學徒トシテ眞面目ナ態度デ討究シタ。阿克マデ討論シテ而カモ野ニ流レズ鄙ニ墮セズ、實ニ洗練サレタ討論振リガ多數ニ觀取サレテ愉快ダツタ。

□人或ハ之ヲ今年ノ學會ノ内容ガ實地的臨牀的ナモノガ多ク、基礎的ナ實驗ノ少ナカツタ事ニ歸スルカモシレナイ。然シ臨牀上ノ出發點ノ明白ナ基礎的實驗ハ實地家ニトツテ誠ニ參考トナル所ガ多イ。今年ハ基礎的ナ報告ニ對シテモ例年ニ比シテ割合討論ガヨク出ダ様デアル。又中ニハ近時ノ學會ハ大ヤ蒐ヤノ學會ダナド、非難スル人ガアルカモ知レヌガ、實驗的ナ研究モ學會ト

シテ大ニ歡迎コソスベケレ、之ヲ欣バザルガ如キハ些カ解シ難キ所デアル。生理病理ヲ人體ニ就テ確實ニ知リ難イ所ハ動物實驗ニ俟ツヨリ他ハナク、之ニ由ツテ得タ所ヲ實地ニ適用スル事ニヨツテ治療上ニモ新生命ガ開カレル。實地家が只理由モナク人ノ眞似ヲシテ治療ヲシテ居タノデハ進歩ハ期待セラレナイ。

□學會ノ演題ノ増加ト云フ事ハ一面研究者ノ輩出ヲ意味スルカラ慶スベキ事デハアラウガ、只演題ノ多イト云フダケデ茲二三年來ノ様ナ狀態デハ學會ノ本質カラ言ヘバ進歩ト謂フヨリハ寧ロ一種ノ變態ト名ヅクベキデアル。今年ノ學會デ來年カラ演題ヲ六十題トシ、大學各教室又ハ病院等カラ代表的ノ演題一題宛ト制限シ、演說時間ヲ充分ニ與ヘテ會員相互ガ自由ニ討究シヨウト云フ様ニ規則ヲ改メタ事ハ學會ノ今後ノ爲ニモ、外科學ノ進歩向上ノ爲ニモ誠ニ慶ブベキ事デアル。實ハ此ノ大英斷ヲ今少シ早ク行ツテホシカツタ様ニサヘ思ハレタ。今年ノ學會ノ模様デ例年ノ情氣ガ一掃サレカケタ事ヲ明白ニ知ツタモノハ來年ノ學會ノ有様ガ目ニ見エル様デ今カラ之ヲ待ツテ居ルデアラウ。(妄言多謝)